



2025

# 学校だより 本荘 Smile

令和7年度 第35号  
令和7年12月23日  
熊本市立本荘小学校  
校長 西川 英臣

**歴史を学ぶことも修学旅行の目的の一つです。出島での思い出。**



修学旅行の2日目のお話です。この写真は出島資料館です。出島と言いますと、6年生の歴史の教科書で出てきますので、そこで初めて出島の存在を知った方も多いでしょう。小学生が出島を学ぶのはなぜでしょうか。小学生が出島を学ぶ意味は、日本の歴史において非常に重要だからです。出島によって、6年生の子どもたちは「鎖国」という時代背景を理解することができます。これは、現代のグローバル社会を考える上で、具体的な学びを提供していることにもなります。つまり、こういうことです。江戸時代の日本は「鎖国」をしていたと教わりますが、実際には完全に国を閉ざしていたわけではありませんでした。これはみなさんご存じでしょう。出島は、オランダと中国（唐人屋敷）を通じて、西洋やアジアとの貿易が細々と続いていた鎖国の中での唯一の海外との窓口でした。出島は扇の形をした、小さな島です。ここが当時の日本にとって、モノと情報の出入り口であり、子どもたちは、教科書で見る地図上の長崎の小さな土地が、当時の日本にとってどれほど重要だったかを学びます。そして、海外の珍しい品物だけでなく、世界の情報や学問（蘭学）が入ってくる最前線だったということを理解していくのです。また、世界とのつながりや「多様性」について考えるきっかけになるという側面もあります。例えば、異文化交流の難しさです。当時の人々は、なぜポルトガル人が追い出され、オランダ人だけが許されたのか、という背景（キリスト教の有無など）を学びます。  
(裏面に続きます)

これは、宗教や文化の違いが交流にどう影響するかを考える素材になるのです。現代のようにインターネットで瞬時に世界中の情報が手に入る時代とは対照的に、ごく限られた人だけが海外の情報に触れた状況を学ぶことで、情報の価値や多様な視点をもつことの重要性に気づいていくのです。私は社会科の教師ですので、出島を見学することで、歴史を「自分ごと」として捉える体験ができることが重要だと考えます。社会科という教科における、現地学習の大切さを学びんでほしいのです。長崎の出島は、現在、江戸時代の街並みが復元されています。小学生が実際に訪れ、当時の建物の配置や生活の様子、持ち込まれた品々を見ることで、歴史上の出来事を「過去の物語」ではなく、「かつて確かに人々が生活していた場所」として、実感をもって捉えることができます。埋め立てられた出島が、どのように発掘・復元されているかを知ることが、歴史が今につながっているという意識を育みます。まとめると、小学生が出島を学ぶことは、歴史的な知識を得るだけでなく、当時の人々の暮らしや世界の状況に思いを馳せ、現代社会と比較しながら国際的な視野や柔軟な思考力を育む上で、非常に価値のある学習となるのです。6年生の国語で学習した「模型のまち」という物語は「ひろしま」のお話でした。本荘小のこどもたちは「ナガサキ」で主人公と同じ体験をしてきたのです。

この日はスタジアムシティにも行きました。昔の施設と現代の最新の施設。違いはあるけれどもそこには人の営みがあることを学ぶことができた令和7年度の修学旅行でした。(校長)

### 校長先生の虫眼鏡 「圧巻スタジアムシティ！長崎はすごい」

今回の修学旅行の目玉はスタジアムシティの見学でした。サッカースタジアム、プロバスケットボールのアリーナ、それが市内の中心部にあるのです。J1やB1で活躍しているのもうなずけますね。

